

南牧〈群馬県〉 **せがい造りのバルコニーが並ぶ限界集落**

まちあるきの考古学



群馬県の西端、高崎から下仁田を過ぎ、さらに10kmほどの山間部に入った南牧村に、木造二階建て切妻屋根に、せがい造り(出桁造り)のバルコニーを備えた民家が数多くみられます。

これらの民家はかつての養蚕農家です。

二階養蚕室の管理用の通路として、せがい造りのバルコニーが作られたといえます。

南牧村は日本一の「限界集落」といわれています。

限界集落とは、過疎化が進み、人口の半分以上が65才以上の高齢者になって、冠婚葬祭など社会的共同生活の維持が困難になっている集落を指します。

南牧村の高齢人口比率は58%で日本一の高さです。

逆に、幼少人口比率は4%で日本一の低さといえます。

南牧村は、将来、消滅する可能性が日本で最も高い村、といわれているようです。

南牧のせがい造り(出桁造り)には作法があるようです

「せがい造り」は、「出桁造り」とも呼ばれます。

本桁から腕木のように梁を突き出して出し桁を乗せ、床板を張った棚(バルコニー)をもつ家屋で、和船の両舷にある舟棚(船柵・せがい)に似ているので、こう呼ばれるようになりました。

東日本に数多く見られる建築構造ですが、南牧村のせがい造り家屋は、腕木上の床板が、2階の床ではなく、屋外バルコニーになっていることが特徴です。

2階が養蚕室として使われる中で、せがい造りのバルコニーは、養蚕室の管理用通路としての機能を果たしていたそうです。養蚕を第一に考えた家屋構造といえます。

そこには、ある作法があるようです。

バルコニーは道路に面して、寸法は半間、手摺をつけ軒裏を張らない軽快な造りであることです。明治初期から今まで、南牧のどの家屋も、この作法を守ってきたように思えます。





大崩山



蟬の溪谷



せがい造りのバルコニー民家は、山峡の南牧川沿いの集落にみられます。その入口にあたるのが下仁田の町です。

下仁田の町の中心部からは、一風変わった山容の山を、たくさん見ることができます。
大崩れした山肌を見せる山、尖がった頂をもつ山、山頂が

テーブル状の山、川床に横たわる青い巨石、などなど

下仁田の一带は、日本列島の地質構造からみると、日本列島の生い立ちを解明するうえで重要なカギをにぎる、地質現象が集中する場所だそうです。

⇒「下仁田ジオパーク」で検索



南牧川沿いに、砥沢という集落があります。

古来から良質な砥石の産地で、江戸時代には幕府の御用砥として採掘され、集落はとても繁栄したそうです。富岡は利根川の水運を利用し、江戸に砥石を運ぶための中継地として、江戸時代に開発された町でした。

近年まで、どの家の台所にも砥石があり、農林業など刃物を使う産業には砥石が不可欠でした。また、戦国時代には、良質な砥石は軍事物資として重用されたと思います。

南牧川沿いは、古来より関東一円の良質な砥石の供給基地だったようです。これは、特異な地質構造と関連があるのかも知れません。